

# AZ stocks

創刊号

【無料】電子版同人マガジン



幻惑の悪魔

メフィストフェレスの館

そこで繰り広げられる狂想曲



女性向けオリジナル作品 (BL作品)



## Contents

- 目次
- キャラクター紹介
- 甘い時間 (BL小説)
- 4コマ漫画
- 微動 (BL小説)
- 4コマ漫画
- 編集後記
- 奥付

### 【電子版同人マガジンについて】

こちらは天使・悪魔・墮天使などをテーマとした異世界ファンタジー漫画や小説、イラストを掲載した電子版雑誌です。

### 【発行元について】

女性向けオリジナル同人サークル「となりくみ事務局」が作成しています。

\*URL\* <http://www3.to/tonarikumi>  
<http://june.lix.jp/azstocks/>

\*E-mail\* [tonarikumi@gmail.com](mailto:tonarikumi@gmail.com)

ご質問やお問い合わせは上記までお願いします。ご感想などいただくと、創作活動の励みになります。

## \* 祝 \* 創刊号 \* \* \*

お蔭様で無料の電子版同人マガジン[AZ stocks]を発刊することができました。パソコンでもスマホでも閲覧が可能な形で作品を公開しようと思い、電子版の雑誌を作成することにしました。

発行は不定期ですが、BL作品を連載していきますので、どうぞ末永くお付き合いください。

作品はイラスト・漫画・小説など、色々な形で発表していきます。パソコンで、スマホで、いつでも楽しんでいただくと嬉しいです。これからもよろしくお願いたします。 【サークルメンバー同】





# character



## 【随天使メフィストフェレス】

幻惑の魔術師と言われる悪魔。  
天界でも魔界でもない狭間の界にある  
薔薇の館で暮らしている。



## 【随天使アスペエル】

見捨てられたモノという意味の名の悪魔。  
正義感溢れる天使だったが、小さなボタンの掛け違いで  
親友フェンリエルと共に随天してしまった。  
現在はメフィストフェレスのペットになっている。



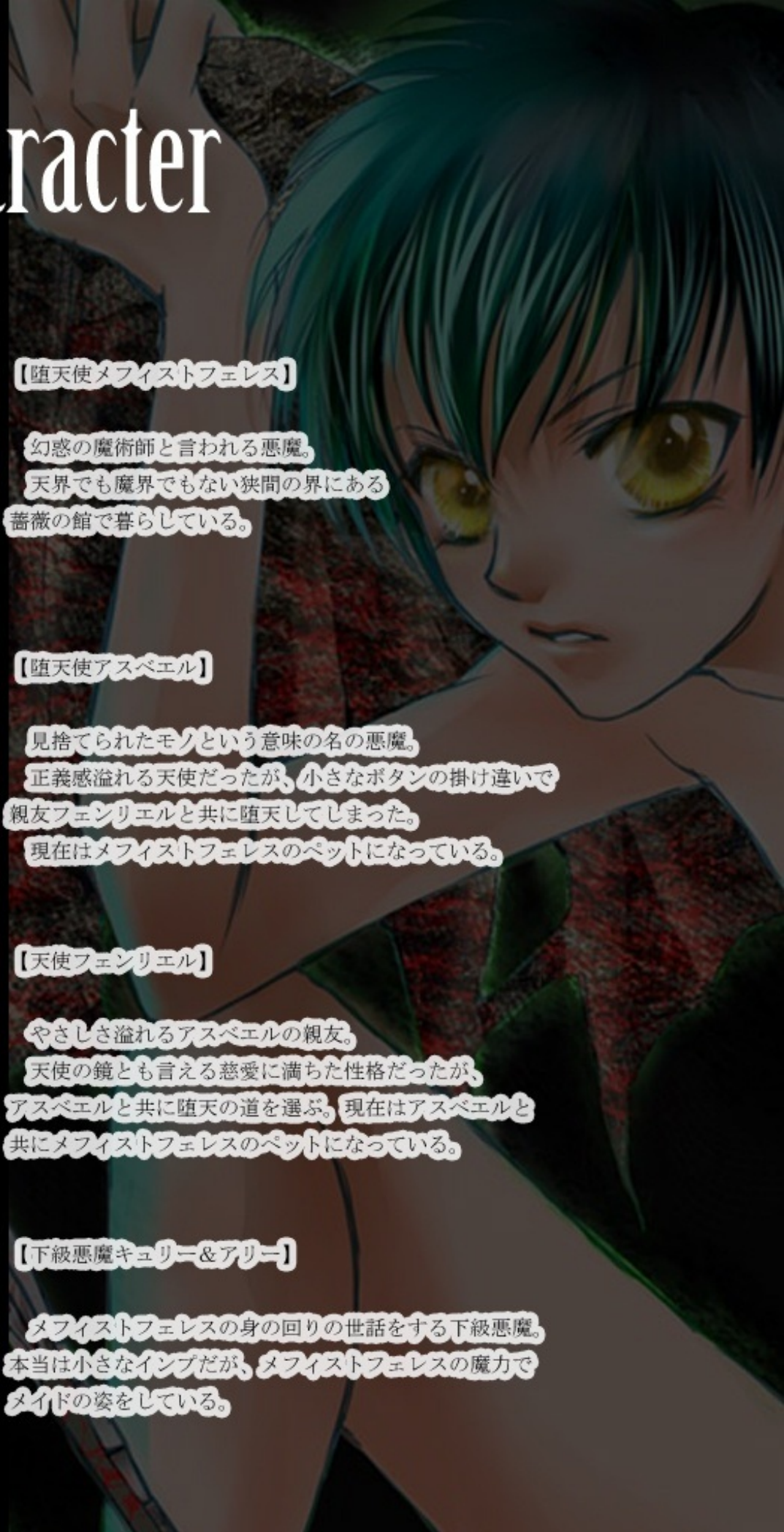
## 【天使フェンリエル】

やさしさ溢れるアスペエルの親友。  
天使の鏡とも言える慈愛に満ちた性格だったが、  
アスペエルと共に随天の道を選ぶ。現在はアスペエルと  
共にメフィストフェレスのペットになっている。



## 【下級悪魔キュリー&アリー】

メフィストフェレスの身の回りの世話をする下級悪魔。  
本当は小さなインプだが、メフィストフェレスの魔力で  
メイドの姿をしている。





# 甘い時間



ここは薔薇の館  
天界、魔界、いずれにも属さない狭間の界に建つ  
悪魔メフィストフェレスが支配する館

甘く危険な香りに包まれた庭には  
真紅の薔薇が咲き誇り  
訪問者を魅了する

歪み続ける世の狭間で  
幻想の空間に酔い  
まやかしの時間に身を委ねる

怠惰で漫然とした時間に溺れる愚者が払う代償とは・・・



空はあいまいな色彩だった。時々刻々と変化する運命を映し出す鏡のように変色し、形容し難い模様を浮かべては消し去っていた。

そんな空の下、狭間の界に存在する薔薇の館の庭には沢山のインプ達が飛び交っていた。真紅の薔薇が咲き誇る庭で戯れる小さな下級悪魔達は、紅茶を楽しむメフィストフェレスの機嫌を窺っている。

インプは紫を帯びた青銅色の肌と蝙蝠の羽を持つ。その小さな影が不思議な色の空をバックに動くのはどこか可愛い。

変化を繰り返す空と庭一面を飾る真紅の薔薇、そして使い魔、そんな不釣り合いな組み合わせの光景をメフィストフェレスは何とはなしに楽しんでいた。

メフィストが空になったカップをテーブルに置くと、近くに居たインプが二匹近寄って来た。皆と同じ姿だった二匹がメフィストの指先をツイと舐めると、一匹はストレートの長い髪、もう一匹はクルクル巻き毛のメイドに変貌した。二匹はメフィストの世話役の使い魔だった。

「キュリーにアリー、おかわりを頼むよ」

メフィストはカップを小さく弾き、相手の心を惑わせる美声で言いながら微笑んだ。

アリーとキュリーは幻惑の悪魔と呼ばれる主の美しさに恍惚と頬を染めながら笑顔で館の方へ飛んで行った。新しいお茶の葉を取りに行ったのだ。

小さな背中をメフィストが見送っていると、二匹のインプ入れ替わるように、ひとりの少年が館の方から駆け寄って来た。

「メフィスト！ やっとみつけた！」

少年は肩で息をしながら、駆けて来た勢いそのままメフィストに飛び付いた。メフィストは少年の様子に目を細め、ながら囁くように少年の名を呼んだ。

「アスベエル」

メフィストの腕に飛び込んだのは、黒い艶やかな髪と大きな金色の瞳がとても印象的な少年だった。その首元では瞳の色と同じ金の鈴が澄んだ音色を響かせている。

「久しぶりだね。また迷子になってた？」

「またってなんだよ、またって！ なりたくてなってたんじゃないよ。バカ館が悪いんだ！」

怒りに任せて毒吐くアスベエルの頭をメフィストが可愛くて仕方が無いといった表情で撫でる。

「カップを落としただけで、いきなり訳の解らない空間に飛ばされてさ。同じトコ、グルグル歩き回されたんだよ！」

アスベエルは一生懸命訴えるが、聞いているのかいないのか、メフィストは笑顔のままアスベエルの髪を梳く手を休めない。

「ねぇ！ 聞してる？ 迷路だぜ、迷路！ しかも階段ばかり！ 足がもうガクガク！」

心配しないどころか、どうでもいいというメフィストの態度にアスベエルの声がどんどん荒くなる。頬を膨らませるアスベエルに対するメフィストの応えはこうだった。

「割れたりしなかつたか？」

何を言うかと思えば、カップの話だ。

「ああ、カップは割れなかったよ。絨毯が勝手に受け止めたから」

アスベエルは唇を尖らせながら小さな声で答えた。

メフィストの住む館は生きている。意志を持つように蠢き、姿を替えるのだ。部屋の壁も天井も内装も、勝手に変化する。廊下が階段に、天井が床に、窓が奈落の穴にと変わることは勿論、時には感情を剥き出しにした獣のように激変することもある。

アスベエルはカップを落とした。それが割れれば床が傷付く。自分が傷付くと判っていて割れるのを見過ごす訳がないのだ。

「わざとじゃないんだ！ ちょっと手が滑っただけ！ そ、そりゃ、熱いスープを床に撒いた事は悪かったかもしれないけど」

メフィストにも責められていると感じたのか、アスベエルはシュンと項垂れた。しかし直ぐに文句の言葉を続けた。

「でも、いくらなんでも酷過ぎる！ 出口が見つからなくて、気が狂いそうになったんだ！ もう会えないって、本気で思ったんだから！」

目尻に涙を溜めて必死に訴えるアスベエルはとても可愛らしく、メフィストの笑みを誘った。

メフィストはアスベエルの顎に指を絡めた。そして慰めとでもいうように舌先でアスベエルの目尻に浮いた涙をぬぐい取った。

「元々機嫌が悪かったんだよ。この館の機嫌ばかりは、私にも判らないからね。ほら、噴水の形が変わるよ」

膨れっ面をしているアスベエルを膝の上に抱き上げると、メフィストは噴水を指差した。

ちょうど噴水の中にある石像が形を変え始めたのだ。そこの空間だけが酷く揺らめき、月を抱く墮天使の像が翼を持った人魚へと変貌する。その石像が現実の物として確立されると、何事も無かったかの如く噴水の白い飛沫が飛び始めた。

「絶対狂ってる。この館」

「まあ、設計者が設計者だから」

余り気にした様子も無く言いながらメフィストはアスベエルの髪に軽く口唇を押し当てた。

アスベエルという少年は少し前にメフィストが拾った墮天使である。だが、その姿は一般的な墮天使達とは異なっていた。アスベエルは魔界に生息する下等悪魔が持つ、蝙蝠の黒い翼を背中に負っていた。

独特の光沢を持つ黒い翼には神経や血管が浮き出て、生々しく醜い筋が幾つも走っている。それらはアスベエルの動きに合わせて生を営む動きを見せるのだ。

見る者によっては『毒々しい』『気持ちが悪い』と称するだろうが、メフィストはこの珍物がいたく気に入っていた。更にアスベエルの勝気で活発な性格も嫌いでは無い。人間が猫を飼うように、メフィストはアスベエルに首輪を付けて所有していた。

メフィストの膝の上に居るアスベエルは少し気が治まったのか、口を嚙んだ。そして撫でられる感覚にうっとりとしながらメフィストの胸に頬を摺り寄せてきた。

「アスベエルが迷子になっていた、ということはフェンリエルも？」

メフィストの質問に、アスベエルは首を傾げた。

「さあ？ 俺が変な所に飛ばされる前までは一緒に居たけど？」

フェンリエルという少年もメフィストがアスベエルと一緒に拾って来た、これまた珍物である。どうやらその少年も館の中で迷っているらしい。

「大丈夫かな？ あの子はちょっと特殊だから」

メフィストは館の方をチラリと見ながら心配そうな言葉を呟いた。心配なのはアスベエルも同じである。

「俺、探すよ……」

頷きながらアスベエルは言ったが、なかなかメフィストの膝の上から動かない。久し振りに会えた主と離れたくないというのが正直な気持ちだろう。

アスベエルの想いを察してか、メフィストも背中や頭、顔を撫でる手を止めようとはしなかった。愛猫を撫でるようにメフィストが手を動かしていると恍惚とした表情でアスベエルが言った。

「キスしたい」

鼻に抜けるような甘い声だった。メフィストはわずかに首を傾げた後、クスッと小さな笑いを漏らした。

◆◇◆

空は薄い茜色に変わり、そよぐ風が薔薇の香りを運んでくる。

その香りに酔い、無我夢中で口唇を重ねて来るアスベエルを抱きながらメフィストはクツクツと喉で笑っていた。

アスベエルはとても素直だ。これから先の行為に妖しい期待を抱く彼は欲望を隠すことなくメフィストにぶつけてくる。

何度触れても飽きることがないアスベエルの柔らかな唇を楽しみながら、メフィストは快楽に酔い痴れるアスベエルの姿をとっくりと目でも楽しんでいた。

「可愛いね、アスベエルは」

メフィストの囁きでアスベエルの気分が更に高揚する。まだ口付けしかしていないのに、アスベエルは頬を紅潮させて「ああ」と喉を喘がせた。

「どうしたの？」

メフィストはクスクスと喉で笑いながら、大人しくなったアスベエルの耳に囁いた。答えを待ちながら耳や首筋、頬に舌先を這わせていく。

ピクン、ピクンと細かく震えながら答えに迷うアスベエルを見詰めるメフィストは意地悪い笑みを浮かべ、答えなさい、と目で促した。

「したい。ここでやってよ」

「何を？」

「な、なにって」

「アスベエル？」

メフィストの言葉は心に絡み付くような、ねっとりとした甘い囁きだ。欲望に正直に、淫らに悶えながら求めよ、とメフィストは言っていた。

アスベエルが戸惑う姿を見詰めながらメフィストは静かに答えを待った。アスベエルが従わない訳がない。ペットは主に忠実なものだ。

「抱けよ。抱いてって言ってるんだ。今ここで！」

顔をあげたり、俯いたり、口唇を尖らせたり言葉を飲み込んだり、もじもじと迷う様子を見せていたアスベエルだが、耐え兼ねたように声を上げた。怒っているような言い方は少しでも羞恥を隠そうとする負けん気の表れだ。

「意地っ張り。たまには可愛くおねだりしてくれたっていいのに」

メフィストは苦笑しながら、もう一度アスベエルの頬にキスをした。



さっきまでカップやティーポットが並んでいた円形のテーブルに、今はアスベエルが仰向けになっていた。メフィストは彼の上着のボタンをひとつずつ丁寧に外していく。

意図があると思えないゆっくりとした動作に、アスベエルが頬を染める。それもそのはず。メフィストの視線は露わになるアスベエルの肌の上を嘗め回すように這っていた。

「胸まで赤くなってる。恥ずかしいの？」

解り切ったことを尋ねながらメフィストはアスベエルの服をパサリと落とした。情事の鑑賞者であるインプ達がその下に一斉に潜り込む。

服がモゾモゾと蠢き、宙を漂い始めた。アスベエルの体を包んでいた淫らな欲の香りが残る服は、下級悪魔達にとって一種のクスリのようなものだった。

メフィストが指先をそっとアスベエルの首筋に当てた。指を滑らせ、アスベエルの身体の線を辿り、胸に息衝く小さな蕾を摘み上げる。ようやく与えられた刺激にアスベエルの体がピクンと反応した。

「あっ！」

靴下を履いたままのアスベエルの足がテーブルからはみ出し、ぴくぴくと震えている。メフィストの指が胸から腹へ滑るにつれて、身体の震えは大きくなっていった。

「ああっ、メフィ、スト！」

「なに？」

「はやく、触って」

「どこに？」

「そ、そこ。お、俺に触ってえ」

じれったい愛撫に耐え兼ねたアスベエルが自分から体をメフィストに押し付けてきた。積極的に求めてくる姿を見下ろしながらメフィストは一度「かわいい」と言い、アスベエルの楔に指を絡めた。

「アアッ！」

メフィストは胸の小さな蕾を摘み、弾きながらアスベエル自身の先端を引っ掻いた。透明な涙を流す楔は淫らにたちあがり、更なる刺激を求めて震える。メフィストが緩慢な刺激を与え続けていると、アスベエルが鼻に抜ける甘い吐息を吐いた。

「気持ち良い？ アスベエル」



「ん、イイ。で、でも……これだけじゃたりない」

「――そう？ でもとりあえず、このまま一回イク？」

「や……だ。後ろに……ナカに入れてっ……それから、イきたい！」

「欲張りだね。可愛い声を聞かせてくれたら、ちゃんと入れてあげるよ？」

メフィストの手の動きは単純だ。だが、悪魔が与える刺激は身を焦がすほど甘美で淫猥で危険だ。メフィストは淫魔を召喚していた。アスベエルはメフィストの手と、召喚された淫魔の両方に体を預けていたのだ。

そそり勃つアスベエル自身の先端から溢れ出る透明な液を吸い上げ貪る下等悪魔の動きを、メフィストは面白そうに見詰めていた。アスベエルの内腿は彼自身が流す雫で濡れそぼり、淫猥な色に染まっている。

「やっ！ あああっ！ メフィッ……」

「気持ちいい？ 可愛いよ、厭らしく濡れて。空の茜色が写ってるみたいだ。もっと早く擦ってみようか？」

「ああっ……やっ、ダ……メ……ダメ、ダメだって……そんな、つよ……くした……ら……イ……く……ああっ」

「いいよ。イって。一回じゃ止めないから。満足するまで何度でもやってあげるよ。だから可愛い声でどこがどんなに気持ちいいか、ちゃんと言って？」

メフィストはそう告げるとアスベエルの中心を抜き擦った。

手の動きは変わらないのに、アスベエルは興奮に震え、両手でテーブルにしがみ付いて激しく腰を打ち揺らした。その揺れで端に寄せてあったカップやポットが滑り落ちる。

柔らかい土に育まれた自然の絨毯がゆっくりとうねり、落ちてきたカップやポットを優しく包み込んで割れるのを防いだ。

「ああっ！ メフィッ！ もっと……もっと、弄って。先、がいい。先っぽ、もっと強く擦ってえ。先っぽから……中に……中にイれて掻き乱して……。で、ないと……イっちゃうんだ！ あうっ……あ」

薄っすらと赤く染まる身体に汗が飛び散る。悶え善がる姿は少年とは思えぬ程の淫猥さに満ちていた。

「あ……そこ、気持ち……イイ……先……擦りながら、前、そ、そこ！ 前の、中に入れて……あ……ああ……あ……」

アスベエルは喘ぎながら腰を振った。メフィストの指に絡んだ双頭のヘビの姿をした淫魔が長い牙をアスベエルの楔に突き立てていた。涙を零す先端から中へ突き入れられた長い牙が柔らかな内壁を擦り、刺激し、媚薬を含んだ毒素を容赦無く吐き出していた。

前だけで絶頂に達しそうなアスベエルを見下ろしていたメフィストが口角の端をそと吊り上げながら言った。

「イって」

操られるかのごとく、アスベエルが艶めかしいよがり声を上げて背を反り返らせた。

「アアッ！ アアアアアッ！」

歡喜の涙を零し悶えながらアスベエルが悦楽の極みへ駆け昇った。それと同時に、華が咲くように純白の飛沫がメフィストの手を飾った。手に収まり切らず、ポタポタと庭の緑に散ったそれにインプ達が群がり、小さな声を上げながら啜り始める。美味しいお零れだった。

荒い呼吸を繰り返すアスベエルを見下ろしながら、メフィストは見せ付けるように、欲に塗れた手を緋い舌でひと舐めする。そして何も言わずにアスベエルの口元に差し出した。

アスベエルは目を細めて舌を伸ばしてくる。白く汚れた主の長い指を口に含み、小さな音を立てながら舐め取っていく。健気な姿をメフィストは満足そうに見詰めた。

全てを舐め終えてもアスベエルは愛撫を続け、舌を這わせていた。奉仕を続ける姿にメフィストは小さな笑いを漏らし、覆い被さりながら耳元に口唇を寄せた。

「もっと気持ち良くさせてあげる。イイ子だから肢を開いてごらん。自分で肢を抑えるんだよ。動かないように」

メフィストの囁きは相手をたやすく操る。アスベエルの手がユルユルと動き、自分の肢を掴む。靴下だけに飾られた肢が空に向かって差し上げられた。円形のテーブルの上に仰向けとなったアスベエルは恥じる様子もなく秘処をさらけ出した。

メフィストは露わになった秘処を見詰め、唾液で濡れた指を宛がった。柔らかい肉を傷付けないようゆっくりと中へ滑り込ませる。主の美しい指が一本埋没した秘処を見上げるアスベエルは不服そうに眉を寄せていて、小さな吐息を吐くだけだった。

「一本だけじゃ感じないんだ」

「.....気持ち良くするって、言ったじゃないか.....はやく.....しろ.....よお」

文句を告げるアスベエルの語尾が甘く溶けた。メフィストの指が小さな円を描いて刺激を与える。それがアスベエルの胸の奥に潜む悪魔の欲望を引き摺りだすのだ。

「.....ふ.....あああ.....」

メフィストの指が動くと同時に、淫魔がアスベエルを犯していく。メフィストの指が的確にアスベエルの快楽ポイントを刺激し、双頭の淫魔が悦楽を増幅する。柔らかい内壁を弄られ、指先まで痺れるような快感にアスベエルが喉を反らせた。

「ヒッ！ やっ.....あん.....メフィ.....あっ.....ああん」

「厭？ 嘘は駄目だよアスベエル。ここをこうされるのが好きだよ？ じっと見詰められながら、後ろを攻められるのが」

「んあ.....好き.....気持ち、イイ.....もっと、もっとやって.....ああ.....」

「淫乱だね。でもイイ子だ。もっともっと気持ち良くしてあげるよ。でももう少し我慢して。痛い思いはさせたくないから.....」

首に付けられた鈴がアスベエルの喘ぎ声と協和して厭らしい音を奏でる。

メフィストは鈴の音に合わせて指を動かす。そうしながら悪魔の笑みを浮かべた。見る者に不安を抱かせるような笑みだった。

アスベエルの秘処に這うメフィストの手には、毒々しい色を纏う八首の蛇が絡み付いていた。その首の二つがアスベエルの秘処に潜り込み、代わる代わる抜き差しを繰り返す。残りの首は思い思いに肢に巻き付き、長い舌で執拗な程に愛撫を繰り返していた。

やがて一本の首がアスベエル自身に絡み付き、鈴口に舌を差し入れて中を掻き乱しながら溢れ出る

蜜を啜り始めた。

「あっ、あっ、ああ……うあ……あ……」

アスベエルは前後を同時に攻められ激しい快感に悶えながら、愉悦の涙を流した。身体中で蠢く厭らしい感触に堪えきれないのだ。腹部の奥深くを乱すぬめらかな感触から得られる悦楽に、全神経が狂っていく。

「メフィスト！ もっ、もう、ダメ……イク……イク、よお……」

「もう少し……アスベエル。君の中で蠢くものがあと三度、大きく円を描いたら……その後はもう何も解らなくなるよ。最高の快感が君を襲う。怖がらなくていいから、それに全てを委ねて」

「あああっ！ メフィス——メフィツ……イイツ！！」

三度、二度、そしてあと一度……。

絶頂への期待と興奮が、アスベエルの全身を支配した。

理性など残っていない。いや、そんなものは最初からメフィストの手によって奪われていたのかもしれない。アスベエルは極限まで高められた快感に悲鳴を上げながら身を委ね、そして溺れた。

メフィストは口付けの痕が散らばるアスベエルの身体から、ゆっくりと離れながら、絶頂に達する瞬間を目に焼き付けた。

何度見てもこの瞬間は見飽きることがない。

まだ幼さを残す少年が全身全霊で浅ましい情欲に溺れていく。それは見ているだけで十分な快感を与えてくれる。

アスベエルがぐったりと弛緩する頃には、メフィストの手の中で絡み付いていた下等悪魔の姿は消え、どろりとした白濁の液だけが残っていた。

「……ヨかった？」

無防備な身体を見下ろしながらメフィストはそっと声を掛けた。閉じられていた瞼が力無く開き、潤んだ瞳がメフィストを見つめる。

「ん……良かった……」

珍しく素直に応えたアスベエルに、メフィストは満足そうな笑みを向けた。

傍で浮遊していたキュリーが新しいカップを準備し、アリーが紅茶を淹れてくれる。テーブルの上が元のように整えられていくのを見ながらメフィストはアスベエルを愛でる。

「いつ見ても可愛く乱れてくれるね、アスベエル。素直に欲に溺れる君は好きだよ。口は素直じゃないけど」

喉の奥で忍び笑いを漏らしたメフィストはアリーから熱い紅茶を受け取った。それと同時に、情事の一部始終を見詰めていたインプ達がカップを持たないメフィストの手に群がった。先を競うように白濁を舐め始める。メフィストの手は瞬く間に綺麗になった。

「君に舐めて欲しかったんだけど、インプ達の方が早かったね。君を抱いてるとやけにインプが集まって来る。美味しいみたいだね？」

メフィストが笑うとアスベエルは口唇を尖らせた。

「悪趣味だぞ、メフィスト。俺はインプの餌じゃないよ！」

テーブルの上で起き上がったアスベエルは自分の周りに寄って来るインプ達を手で払う。そして宙を漂っている服を乱暴に掴み取った。服に埋もれて微睡んでいたインプ達が驚いて一斉に逃げ惑う。

「アスベエル、インプ達を怖がらせては駄目だよ。色んな雑用をこなしてくれるんだから」

「服取っただけだ！」

「一言声掛けてから取りなさい」

そうたしなめながらも、メフィストはアスベエルを眺めた。

「靴下だけの姿も可愛いな」

「……何だよお」

上着を着ようとしていたアスベエルはメフィストの視線に動きを止めた。 恥ずかしそうに頬を染め、顔を逸らしながらも従順に身体を晒す。メフィストはもう一度、可愛い、と告げて嫌味の無い笑い声を上げた。

そんなメフィストを見詰めるアスベエルの目にはメフィストに対する特別な想いが宿っていた。 緋色の深い緑を映したような、不思議な瞳。アスベエルはメフィストのこの瞳が好きだった。自分が得た悦楽をメフィストにも感じて欲しい。今はまだ小さくて敵わないが、いつかきっとこの人を……。

アスベエルがそんな想いを抱いていることに気付いているのか、いないのか。メフィストは何も言うことなく、笑みを浮かべてアスベエルを見詰めていた。

空は明るい水色に変貌し始めていく。

メフィストは、邪まな想いを抱くアスベエルを知ってか知らずか、優雅な仕種で腕を上げた。どこから現れたのだろう。鴉が一羽、主の白い手を傷付けないようにふわりととまった。

「フェンを捜しておいで」

メフィストが告げると鴉は翼を広げ、頭上を旋廻して不可思議な館の中へと消えて行った。

幻術師という異名を持つ悪魔メフィスト・フェレスが住まう薔薇の館。

アスベエルとフェンリエル。

ふたりの少年を伴い、平穏な時間を漫然と過ごしながら、彼は静かに訪問者を待っていた。

そう。叶わぬ夢、泡沫の悦楽を求めて彷徨う者達を……。

[ 甘い時間一完一 ]

# 裏技

自分の部屋から  
しめ出された。

## ～ 悪魔 メフィストフェレス ～

悪魔の中でも変わり者で有名。

変わったもの、珍しいものが大好きで、  
収集し、愛で、ひとり楽しむ癖がある。

人嫌い・悪魔嫌いで、他者との交流を  
殆ど望まない。

そんなツレナイ彼の気を惹こうと、皆、  
魔界の珍しいモノを携えて彼の元を訪ね  
るが、幻影に惑わされるのがオチ。本物の  
カレに出迎えて貰える者は殆ど居ない。





# 微動



物語は動き出す

誰かに操られる運命の荒波にのまれ

足掻き、苦悩し、悶える者達の

行き着く先にあるものとは……

赤から青へ、紫を経て変貌していくオーロラが空一面に広がり、随分と長い間、奇怪な色彩を見せていた。この奇妙な空のせいだろうか。いつもなら鮮やかに見える深紅の薔薇も、今日はかげりばかりが目立っていた。

そんな薔薇の庭に白衣を翻しながら一人の墮天使が降り立った。

彼は何の迷いもなく薔薇に飾られた道を進み、勝手知ったように大きな館の門を潜り抜けて玄関に立った。すると館の扉は音も立てずに開いた。

開いたことが意外だったのか、白衣の男の表情が僅かに揺れた。そして気を取り直したように無表情に戻ると一歩前に踏み出そうとした。しかし足が止まった。

扉の奥には館の主であるメフィストフェレスが腕組をして立っていた。

その表情は明らかに不機嫌で、全く悪びれた様子もなく仏頂面を晒していた。白衣の男が唇の端を歪めて笑った。

「そう露骨に嫌な顔をするな。『愉しく』なるじゃないか」

「何の用？ サド医師を呼んだ覚えはないよ」

「つれないねえ。確かに呼ばれて来た訳じゃないがね」

白衣の男は、鎖骨辺りまで垂れた長い前髪を梳き上げ、人を食ったように笑った。

厭な顔をされればそれを更に酷い物にしたくなる。この男は相手が拒み、抵抗することを好んで求める癖を持っていた。 サドだ。

「久しぶりに会うんだ。そんな無粋な顔はやめてくれないか？ 綺麗な顔が台なしだ」

そう言いながら白衣の男が館に入ろうと一歩踏み出した。

「用はないと言ったはずだ」

メフィストは訪問を拒否するように言い放った。

「お前には無くとも私にはある」

言い終えると同時、白衣の男は一気に歩を進め、メフィストの直ぐ傍まで移動した。そして乱暴にメフィストの肩を抱き、強引に口付けに及んだ。

「チッ！」

唇は重ならなかった。

口付けを仕掛けた白衣の男が動作を止め、舌打ちし、唇を重ねずにメフィストの髪を鷲掴みにした。苦痛に歪むメフィストを白衣の男は冷たい視線で見下ろし、無造作に左手を差し出した。

その指は急速に伸び、メフィストの左胸を容赦無く貫いた。五本の指全てが心臓を貫いたのである。

「酷いことを」

胸を貫かれて崩れ落ちていくメフィストの後ろで声が聞こえた。

そこには今、銀の砂となって消えたメフィストと同じ不機嫌な顔をした『メフィストフェレス』が立っていた。

「酷いこと？ どっちが、だ。幻影と本物と、この私が区別できないとでも思ったか？ 客の応対くらい本物でやれ」

儼然とした表情で白衣の男が抗議した。

「招いた覚えはないよ、ラマン。招かれざる客は『侵入者』と同義。手間を惜しんで何が悪い」  
幻術使いメフィストフェレスは、自分が招き、迎える価値があると判断した客以外に本体を見せない

。「この私が往診に出向くなんぞ、君の所以外ではまずありえないと思わんのか？」

白衣の男は魔界でも有名な腕利きの医師、ラマンだった。彼は残念そうな表情を作って大きな溜息を吐き、大袈裟に首を振った。

「呼んでないよ。ウチには病人も怪我人も居ない。お引き取り願おう」

芝居をしても無駄だ、とメフィストは突っぱね、頑として館に入れようとしなかった。ラマンもラマンで引き下がろうとしない。意地の張り合い、口説の並べ合いが続く。

「君が飼っている可愛いペット、そろそろ医師が必要になる頃だろう？」

ラマンはそう告げると再び手を伸ばし、本物のメフィストの顎に指を絡めようとした。しかしメフィストの応えは変わらなかった。

「異状はない」

メフィストは近付いて来たラマンからスルリと逃げ、指を払い、ピシャリと言い伏せた。

冷たい態度のメフィストを見詰めながら、ラマンは振り払われた手を大人しくひいて言葉を続けた。

「アレは異状が出てからでは手遅れになる。この魔界でどこまでもつかはメンテナンス次第だ。定期的に検診してベストな状態を維持し続けなければならんモノだ。それくらい解っているだろう？」

「……」

的を射た言葉だ、と認めるように沈黙したメフィストだが、その表情はいつそう不機嫌さを濃くする。解っていても、ただ、純粹にラマンを館へ入れたくないらしい。

そんなメフィストにラマンは一步後にひいた。押してダメなら引いてみる、といった態度だった。

「とはいえ、火急という訳じゃない。珍しい茶葉を手に入れたからな。診察はそのついでだ」

ラマンはふわりと笑って手を差し出した。そこには小さな箱が乗っていた。

「明前龍井茶」

箱の中身をラマンが告げるとメフィストの表情が華やいだ。細く柔らかい銀髪を揺らしながら好物を目の前にした子供のように笑顔を作ったのだ。メフィストフェレスは魔界でも有名な珍しい物好きだ。その気を惹く方法をラマンは心得ていた。

「明前龍井茶とは、珍しいね」

箱を受け取ろうとメフィストが手を延ばすと、ラマンがスイッと箱を逃がした。条件があるというようにメフィストの手を制する。

「ゆっくりとお茶の一杯くらい、貰えるだろうな？」

「結構」

ようやく色好い返事を得たラマンが酷い笑みを浮かべたことにメフィストは気付かなかった。

「インプや幻術が淹れた茶なんぞ、お断りだが？」

自分を出迎え、相手をするのはあくまで本体だ、とラマンは念押しした。しつこいな、と目で抗議



しながらも、メフィストはラマンの視線を正面から受け止めて頷いた。

「当然だ。折角の明前、他人の手に任せるなんてもったいない。『私』が淹れるよ」

メフィストは歌うように言い、箱を受け取った。この箱のお陰でラマンは『客』として認められたのだった。

「サンルームへ案内を」

お気に入りの宝石を扱うように優しく箱を撫でながらメフィストは使い魔のインプを呼んだ。手の平に乗るサイズの小さなインプはラマンの顔の高さで宙に止まると、数回、目を瞬いて案内します、と会釈した。

「もう少し色気のある案内係は居ないのか？」

「贅沢言うんじゃないよ」

自分の前を飛ぶ下級悪魔に文句を言うラマンを黙らせるようにピシヤリと告げると、メフィストはお茶の準備をするべく奥の部屋へと姿を消した。

ラマンは案内係のインプの後ろを追い、サンルームへ向かった。

「館に侵入できた、な」

口角を軽く吊り上げたラマンの背中で、館の扉がパタリと閉じた。



黒曜石でできた噴水が白い飛沫を振り撒き、薔薇が妖艶に咲き乱れる庭を横目に、石造りの廊下をインプとラマンが進む。

前に行くインプをチラリと見遣ったラマンは足を止めて何かを考える仕草を見せた後、くるりと踵を返した。

来た道に戻り、通り過ぎた角を違う方向へ曲がって行く。異変に気付いたインプが飛んで戻り、ラマンの顔の前で両手を広げて道を外れたことをとがめた。

サンルームへ向かうようラマンに向かって何度もインプが鳴く。ラマンは眉間に皺を寄せてインプを睨み付け、忠告を聞こうとしなかった。それだけではない。

「下級悪魔が偉そうに指示するな」

不快感を露にして言うと、ラマンは左手でインプを強く握り潰した。

キィッ、と悲鳴が聞こえたかと思うと、指の間から銀の灰がサラサラと零れ落ちる。

無慈悲に銀の灰を振り撒くとラマンは辺りを見回した。派手でないものの、細やかな装飾が施された石造りの廊下が続いている。

さて、と独り言を漏らした後、まるで目的の場所を知っているかのようにラマンは颯爽と歩を進め、館の奥へ進む。邪魔者は居ない。後は当初の目的を達成するだけだった。

コツコツと靴音を鳴らしながら進むうちに、ゆっくりと廊下が変形し始めた。

ここはメフィストフェレスの館。

意志を持つ館は、主の意に反する行為を赦さない。大人しくサンルームへ行こうとしないラマンを

諫めるように館が姿を変えた。

「小賢しい」

吐き捨てるようにラマンが呟いた。

ラマンの前に出来上がったのは、遙か彼方まで続く石造りの廊下だ。段の低い階段が、真っ直ぐ、視線の更に向こうへ伸びている。景色というものが全く存在しない、真っ赤な光の世界だった。

通常であれば五分と経たぬうちに発狂してもおかしくない光景だった。

「ふん。マルパスが造った『意志のある館』か。主の意に従順とは困ったものだな」

さほど困っていなさそうに呟くと、ラマンは右手を持ち上げた。白い手袋を外し、右手を軽く翳して誰かに聞かせるように言葉を続ける。

「『神の偽手』この手は創造主たる神の手を偽造した物だ。『模造』ではなく『偽造』なのでね、残念ながら生命や世界を創り出す力は無い。だが」

翳された手の平には不可思議な紋様が刻まれていた。

或る者はそれを「眼のようだ」と称するであろうし、また或る者は「術を発動させる陣だ」と称するであろう。

ラマンが言葉を続けるうちに、その紋様が命を宿したように鈍く光り始めた。

「物の『核』を探る能力は持っている。マルパスが何を用いてこの館を造り上げたのかくらいは容易に知れる。が、私にとってみれば原料が何か、ということを探るよりは『気紛れに変貌している』ように見せ掛けて『何を隠しているのか』いや『何を護っているのか』と言った方が正確かね？ それを探る方が興味がある。試してみるか？」

ラマンはゾッとするような笑みを浮かべた。そう。心底愉しそうに。

人が持つ秘密を暴き、それを握って何かを企む、そんな笑みだった。

すると一瞬で景色が霞んだ。

ラマンの言葉に怯えたように館が急速に変貌し始めたのである。脅しが効いたと言えるだろう。館は「何かを暴かれる」のを恐れ、ラマンを受け入れたのだ。

右手を翳したラマンの前に扉が現れた。

どうぞお入り下さい、と言うかのように扉が開いた。

ラマンがニヤリと勝者の笑みを浮かべた。

この部屋に目的の者が居る。

そう、ラマンの目的はこの部屋だったのだ。明前龍井茶と往診は館に入る口実に過ぎない。

ここに居る者、フェンリエルに独りで接触するのが目的であった。



唐突に訪れた訪問者、それも意外な人物に部屋に居た者は驚愕の表情を隠せなかった。

ベッドの上で本を読んでいたフェンリエルは喉の奥で引き攣った声を漏らし、ジリ、と後ろに退がった。そんな様子を見ながら、ラマンはゆっくり扉をくぐった。その際、悟られぬよう、サワリ、と

扉を撫でて一枚の呪符を貼り付けた。

「Dr.ラマン、どうしてここへ？」

上擦った声でフェンリエルが言った。

怯えた兎に似た様子がラマンの胸に小さな悦びを抱かせた。フェンリエルの怯える姿は、サディストの嗜虐心を酷く刺激するものだった。

純白の翼を揺らしながらフェンリエルはジリジリと後ろに退がっていく。

だが、その背中はずぐに壁にぶつかった。ハッとして振り返っても逃げ道はない。もう逃げられない。ペリドットの瞳が不安と恐怖の色を宿して揺れていた。

「そろそろ辛い頃ではないかね？」

時間を掛けてベッドに歩み寄ったラマンは優しい声でフェンリエルに話し掛けた。それと同時に、ベッドに上がると右手でフェンリエルの細い肩を掴んだ。

触れられた瞬間、ビクンと小さな肩は震えた。ラマンの手に極度の緊張が伝わってくる。

「い、いえ。特に不調は……」

「そうかな？」

ラマンの言葉に続いてトサリ、と小さな音がした。フェンリエルの身体が純白のシーツに倒れこんでいた。その表情は蒼白だった。

「さて、と。でてこい。猫瞳の小僧」

準備は整った、と満足そうな表情を作った後、ラマンは顔を上げて部屋を見回した。

何の変哲も無い部屋だが、どこかに居るはずである。そしてじっとこちらの様子を伺っているはずだ。そう、金色の瞳を持つ、気の強い少年が。

「ダ、ダメ！ 出てきちゃダメだよ、アスベエル！ 僕は大丈夫だから」

ラマンの言葉を遮るようにフェンリエルが叫んだ。ベッドの上に倒れ、肩で息をしながら喘ぐように言うフェンリエルはラマンの手首を力いっぱい掴んでいた。隙を見てラマンに襲い掛かろうとしている親友を守ろうと必死だった。

「相変わらず吐き気がするほど健気だな」

ラマンは反対の手でフェンリエルの手首を掴み上げた。その痛みに悲鳴を上げ、フェンリエルは手を離した。

ラマンはフェンリエルの両手を片手で纏め、頭の上で固定した。空いている右手で服をまくりあげ、露わになった白い肌を撫で始めた。

「や、やめ、て！」

冷たい指の感触にフェンリエルが身を震わせた。反応を面白がるラマンは、冷たい笑みを浮かべて首筋や鎖骨、胸元を淫らな手付きで撫で回す。ラマンの手は撫でるだけで済まなかった。爪の先で小さな胸の突起を引っ搔き、明らかに性的な刺激を与えようとしていた。

「アァ！」

艶のある悲鳴が聞こえた。

ラマンの指がフェンリエルの胸の突起を捕らえ、弄るように擦り上げる。

痛みを伴った刺激がフェンリエルの身体に走り、違う感覚もそれに続く。

強く目を閉じたフェンリエルはイヤイヤ！ と首を左右に振った。

ラマンが嫌がらせを兼ねた触診を続けていると、ほどなくして傍の壁が歪み、ひとつの塊が飛び出した。その塊はラマンに体当たりした後、白衣の胸元を掴み上げた。アスベエルだった。

「フェンに何をやるんだ！」

「別に。治療し易いように少しばかり精気（エル）を抜いただけだ」

体当たりされ、少しばかり後ろに下がったラマンは胸倉を掴まれたまま悪びれた様子もなく言った。アスベエルはドンッとラマンの体を押し遣り、ベッドから降りろ、と睨み付ける。

「治療代は払ってやる。だから余計な事をするな！」

ベッドから降りたラマンとフェンリエルの間に立つアスベエルは怒りに燃える金の瞳でラマンを射抜く。強烈な敵意を露わにしたアスベエルは持っていた拳ほどもある輝石をラマンに投げ付けた。治療代だと顎で示し、去れ、と強い口調で言った。アスベエルが投げたのは人間から得た魂の欠片を集めて作った「輝石」だった。

ラマンはそれを拾い上げて、ほお、と感心した様に頷いた。

「集めた精気（エル）を輝石としたか。メフィストに習ったのか？」

良く出来ている、と誉め言葉を与え、懐に仕舞う。だが、無情な言葉を続けた。

「残念だが、これだけでは足らん」

「！」

冷たい言葉がアスベエルの耳に突き刺さった。

反論しようとしたアスベエルの口が開いたままの形で固まった。ラマンの右手が素早く伸び、アスベエルの首を捕らえていた。その手はアスベエルの首に巻き付いて精気（エル）を遠慮なく抜き取っていく。

「最低でもこれくらいは欲しいな」

ラマンの呟きに続き、さっきの輝石の倍はあろうか、というサイズの物がアスベエルの傍に転がった。たった今、アスベエルから抜き取られた精気（エル）が具現化した物だった。

ドサリ、とアスベエルが床に崩れ落ちた。その体はピクリとも動かない。起き上がる気力もないほど、力を抜き取られたようだ。

抵抗できないアスベエルのシャツを勢い良く引き千切り、ラマンは肌に触れた。悪魔の誘惑に抗える者は多くないだろう。アスベエルは背筋に冷たいものを感じながらも、ジワリジワリと頭をもたげる快樂に息を乱した。

二人を支配し、掌握した事実にはラマンは喉を鳴らして笑った。

「さて、楽しませてもらおうか」

感じていることを何とか隠そうとする姿が意地らしい。ラマンはアスベエルの首筋に舌を這わせた。

薄く見えている血管に沿って舌を這わせ、何度もそれを牙で撫でる。顎の辺りをカリ、と噛んだりしながら愛撫、首筋に幾つも紅の痕を作る。

痛みを与えるために牙を押し当て、小さな傷を複数刻む仕草を繰り返す、ついには胸の突起を牙で挟む。

硬く尖ったそれを甘く噛み、舌の腹で舐めては潰す、という動作を何度かやってやると、アスベエ

ルが喉を仰げ反らせて身を震わせた。

「メフィストに可愛がって貰っているようだな。抱いて貰ったか？ それとも、お前が抱く方か？」  
いい反応をする、と嫌味を告げ、ラマンはアスベエルの下腹部へ手を滑らせた。何かを期待させるようにそこを撫でる。しかし緩慢な動きの手は、喜びを感じるほどの刺激は与えない。

「メフィストが、そんな、安っぽい真似するもんかっ！」

アスベエルは息を飲んでから反論した。頬が少し朱に染まっているものの、口調は荒い。必死に抵抗しようとしているのが見て取れた。

「ふん。当たり前だ。アレの価値も知らぬペットの分際で図々しいのだよ」

ラマンの表情に怒りが混じった。

自分の前には幻術でしか現れない癖に、この猫のような墮天使には優しい顔を見せるメフィストを想うと、ラマンは苛立ちを隠せなかった。

「アレはこの魔界にあって唯一『天に通ずる道』を知る者だ。魔界にありながら墮天していない、天へ帰ることの出来ぬ不完全な天使フェンリエルなどよりもずっと『天に近い稀な存在』なのだよ。その価値がお前に解るか？ 罪を悔い天へ帰らんと、願う者は数知れぬ。天を求めアレを欲し焦がれる者は絶えないというのに……」

アレは誰の手にも墮ちる事が無い……

ラマンは言葉を最後まで口にしなかった。ギリ、と口唇を噛み、何かに酷い憤りを感じている様に沈黙する。

そして八つ当たりのように牙をアスベエルの胸元に走らせ、一筋の長い傷を作った。

プクリと盛り上がり溢れ出てくる紅の雫を舌先にとって唇に塗り付けた後、ラマンはアスベエルを睥睨しながら断言した。

「貴様のような半端者が馴れ合って良い存在では無い」

「……」

深紅に染まった唇のラマンを見上げながら、アスベエルは皮肉な笑みを作った。その顔は、まるでラマンの胸中を知っているかのようなようだった。

「何がおかしい」

「へへへ。他人事のように言ってるけどサ。アンタだって同じだろ？ 墮天した事を後悔してる？ 天へ帰る事を望んでいる？ アレを欲し、焦がれてる？ でも、触らせてもらえないんだよね」

アンタだって、しょせん、半端者のクセに。

アスベエルが晒った。

「黙れ！」

凶星だったのだろうか。

ラマンの雰囲気が一変し、炎にも勝る怒気を孕んだ。いや殺気だったかもしれない。

ラマンはアスベエルの喉に指を食い込ませ、まるでへし折ろうとするかのように掴むと、その体に残っている精気（エル）を全て奪い取った。気を失ったアスベエルの体をベッドへ投げ捨てるとラマンはしたたかに舌打ちした。

忌々しそうにその姿を見ながら更に右手を動かそうとしたラマンの背中に、重い衝撃が走った。フェンリエルが体当たりしたのだった。

「アスに酷いこと、するな！」

弱々しい抵抗だったが、ラマンの手を止めるのには十分な物だった。

振り返ったラマンはフェンリエルの肩を乱暴に掴むとベッドへ叩き落とし、酷い笑みを作って見せた。ラマンがどのような行為に及ぼうとしているのか、フェンリエルには十分伝わった。

フェンリエルが顔を背け、強く目を閉じた。

ラマンは強引にその唇を奪った。重ねるだけで終わりにするはずもない。ラマンはむりやり舌を差し込み、息も全て奪い尽くす勢いで深い口付けに及んだ。

存分に柔らかな天使に唇を貪った後、ラマンが顔を放すとフェンリエルの肺が音を立てて喘いだ。

「生意気な金瞳の分も尽くせよ」

「ああっ！」

フェンリエルの背がキュッ、と丸くなった。ラマンの手がフェンリエル自身を捉えたのだ。蠢くラマンの指の間でフェンリエルの小さな楔が快感に濡れていく。天使の体が悪魔の悦楽に支配されていく。

「ヤ、ダ……、イヤッ……」

震える声で拒絶の意を示したフェンリエルだが、直ぐにその口を嚙んだ。拒否するとどうなるのか。想像するだけでも恐ろしかったのだ。

大人しく悶えるフェンリエルの様子に気を好くしながら、ラマンは空いている手を動かした。次、犯す場所は決まっている。柔らかい双丘の狭間、小さく息衝く秘処だ。そこにアレを捻じ込んでやればどんな反応を見せてくれるのか。血を流しながら喘ぎ悶える姿を想像するだけでラマンは嗜虐心が満たされていくのを感じた。

「ヤァッ！」

ラマンの指が浅く割り入っただけでフェンリエルが高く鳴いた。首を左右に振っているが、その肢は徐々に開いていく。

「淫魔のように肢開いてねだってみせろ。ちゃんと言えれば、優しくしてやる。もちろん、お前の大切な親友とやらにも手を出さないでおいてやる」

フェンリエルが恥じ入るように頬を染め、ゆっくりと肢を開いた。ラマンは細い肢の間に体を割り込ませると、自らの前を寛げ、黒々とそそり立つ魔の楔をフェンリエルの秘処へ押し当てた。

「ヒッアァァァッ！」

フェンリエルが絶叫した。

だが、腰を浮かせ、艶めかしく打ち揺らしながら全身から歓喜の香を立ち上らせていた。血を流し、限界まで開いた秘処は、悪魔の楔が与える悦楽に天使であることを忘れて淫魔のごとく喜びの涙を流していた。

「好い鳴き声だ。天使のくせに体は立派な墮天使だ。柔らかい肉が絡み付いて離れない。俺を包み込んで『もっと強く』と求めてやまないぞ」

自らも快感を得ながらラマンはフェンリエルの胸に「神の偽手」を当てがった。

次の瞬間、鈍い音がした。

フェンリエルの喘ぎ声がピタリと止まった。愛らしい口からは乾いた空気の音が不規則に漏れ出ている。

ラマンの「神の偽手」はフェンリエルの胸に食い込んでいた。心臓を抉り出そうとするように、その指がメリメリと肉を抉っていく。

フェンリエルの大きく見開かれた瞳が大粒の涙を零した。

叫び声の形に開かれた唇が激しく痙攣する。

秘処を犯されながら心臓を抉られる幼い天使の姿はラマンをいたく喜ばせた。好い光景だ、とラマンが目を細め、更に指を動かそうとした次の瞬間、ラマンはハッと振り返った。

腕が動かない。右手首を、誰かが背後から強く掴んでいた。

「うちの子に無体な真似は止めて貰おう」

赤と緑の斑の瞳が強い怒りを宿してラマンを睨んでいた。

銀髪が静かに揺れ、殺気交じりの気がラマンを威圧する。

「メフィスト、お前――どうして」

驚きの意を込めてラマンが尋ねた。神の偽手がフェンリエルから離れる。メフィストが掴む力は尋常でなかった。

「どうして？ コレの事か？」

メフィストが一枚の紙切れを持っていた。それはラマンが扉に貼り付けた、メフィストの幻術を防ぐための呪符だった。館の中を見通す幻視避けの結界符をラマンは部屋の扉に貼り付けていたのだ。

メフィストに見つからないよう、周到な準備の末、ラマンは目的を果たそうとしていたのだが、失敗だった。

ラマンは驚きながらも、メフィストが矢のごとく放ってくる殺気を避け、バサリと白衣を翻して飛び上がると天井に着地し、クルリと回転してから部屋の入口に立った。

「うちのメイドはとても綺麗好きでね」

再び殺気で創り上げた銀の矢を放ってくるメフィストを見ながらラマンは激しく舌打ちしながら飛び跳ね、後ろ向きに回転してそれを逃れた。

顔に掛かる前髪を煩そうに跳ね上げながら、ラマンは不利な状況となったことを認めざるをえなかった。

「私に見られてはマズイ治療なんて、どんな治療をする気だったんだい？」

メフィストがフェンリエルを抱き上げ、胸の傷に手を当てながら言った。自分が付けた傷が治っていくのを見ながらラマンは何事もなかったかのように話し始めた。

「墮天コードは罪の意識の象徴だ。罪を無自覚な者には、コードの発現もまた無自覚なのかと思っ

てな」

フェンリエルはアスベエルと共に墮天してきた者だ。

だが、どうした訳か、墮天使になっていない。

フェンリエルは墮天しながら、天使のままだった。墮天使の証である『墮天コード』が身体の何処にも存在しないのだ。これが無いと魔界では正常な体を保つ事ができない。ラマンはそのことを言っていた。

メフィストはフェンリエルをベッドに寝かせ、その隣に蒼い顔のアスベエルも寝かせた。口付けし、二人に自分の力を分け与えてやってから呆れ顔になる。

「私の質問の答えになっていないよ、ラマン」

メフィストの指摘に苦笑しながら、ラマンは言葉を続けた。

「自覚が無い、ということがコードの発現にも影響するのであれば、『見えない場所』にある可能性もゼロではない。つまりは体の中だ」

フェンリエルを犯し、胸を貫いたのは見えない墮天コードの有無を探るためだった、と言っていた。例えそれが本当だとしても、メフィストには「言い訳」にしか聞こえないのは仕方がないだろう。

「それで？」

大切なペットを守るようにベッドの端に腰を下ろし、優雅に脚を組むメフィストに促され、ラマンは答えた。

「無い。ソレには墮天コードが無い。天使でありながら天使ではないし、墮天使でもない。不完全な、ガラクタだ」

冷たく言い放つラマンを見るメフィストの顔は、館の入口でラマンが見たものと同じだった。

「フェンリエルもアスベエルも今はウチの子だ。こんな勝手は二度と赦さない」

メフィストの声に冷徹さが交った。部屋の気温が一気に下がり、目に見えぬ刃が生まれ出でる。

「ラマン」

静けさの中に底知れぬ恐怖が満ちた。

「私が創る幻影は甘美な物ばかりではない。五感に訴える幻影はありとあらゆるモノになり得る。例えば苦痛――君がその気なら『永遠に』ということも可能だ」

壮絶な微笑を湛えるメフィストとラマンはしばし視線を絡ませたままで居た。

「解った。俺の負けだ」

ラマンは眉を顰めて溜め息を吐いた。

メフィストがパチンと指を鳴らした。

「キューリー、アリー。ラマン医師（センセイ）のお見送りを」

メフィストの前に二匹のインプが現れた。それは少女の姿形を取り、可愛いメイド姿となった。

「こちらへどうぞ」

笑顔の三人に見送られ、ラマンは素直に踵を返した。

「怒った顔もなかなか好い」

スイ、と肩で風を切って白衣を翻すと、ラマンはメイド達の後を追って部屋を出て行った。

「全く、とんだ訪問者だね」

ラマンを送ったのはメフィストの深い溜め息だった。





空に掛かっていた妖しいオーロラが晴れ渡り、今は澄んだ青一色になっていた。

美しい輝きを取り戻した薔薇が咲き誇る庭で、三人は丸いテーブルを囲んでお茶を愉しんでいた。

「ウゲッ！ 渋ッ！ 何、コレ？」

舌にお茶が触れた瞬間、アスベエルは酷く渋い顔を作った。その声を聞いたフェンリエルが手を止め、様子を窺うようにアスベエルを見詰めた。

そんな二人をよそにメフィストは上機嫌でカップを傾けていた。

「明前龍井茶。とても貴重な茶葉なんだよ」

ふーん、と適当に聞き流したアスベエルはカップをテーブルに置き、メフィストの傍を漂っていたキュリーに向かってローズティを頼んだ。

「かしこまりました」

主に忠実なメイドは笑顔で応えて館の方へ飛んで行った。

折角のお茶なのに、と残念がった後、メフィストはフェンリエルを優しい瞳で見詰めた。

「傷は痛む？」

「いえ、大丈夫です」

飲まないと思いたのか、少しずつではあるが口にしていたフェンリエルは、フルフルと首を左右に振って応えた。

「フェン、君はラマンの実験素材（マテリアル）じゃ無いんだからね。嫌なことは我慢しなくてもいい。蹴り飛ばすくらいのことをしておやり」

メフィストの言葉に躊躇しながら頷いたフェンリエルに向かって、アスベエルが語気を荒げた。

「思いっきりやってやれ！ 狙う余裕があったら、アイツの股間をカ一杯蹴ってやるんだ！」

拳を握り締め、ダンッ、とテーブルを叩きながら喚く可愛い金瞳の飼い猫に、メフィストは大きな溜息を吐いた。

「アスベエル、君はもっと考えてから行動しないと駄目だよ。全く、どんどん下品になっていくね。私はどこで教育を間違えたんだろうね？」

わざとらしく頭を抱えたメフィストに、アリーがクスクスと笑い声を上げた。それにつられて他のインプ達も一斉に笑い始める。

不満顔で反論するアスベエルの様子を見ながらフェンリエルも耐え兼ねて鈴の音のような笑い声を上げた。

「なんだよ、フェンまで！」

フェンリエルにまで笑われたアスベエルは、黒い翼を広げて宙に舞い上がった。ツン、と顔を背け、薔薇が咲き乱れる庭に向かって飛翔する。

「ごめん、アス！ ねえ、待ってよ」

アスベエルの軌跡を深紅の薔薇の花弁が飾り、それを追うようにフェンリエルも舞った。

純白の翼が朱の庭に美しく映える。

やがて、黒と白の翼が交差し、薔薇の絨毯の上でじゃれ合い始めた。

その様子をメフィストは目を細めて見詰めていた。

一度乱れても、ここには直ぐに平穏が訪れる。

小さな変貌を見せながらも館は主の意志を忠実に護り、そこにあった。

だが。

小さな異変が起きようとしていた。

異変の種は既に其処に植えられていて、芽生えの時を待っていた。

種はやがて根を生やし、芽を伸ばしていくだろう。

成長していくそれは、確実に波乱と混乱を齎す。

そして世界は迎えるのだ

変貌の刻を――。

1万年と2千年前から ゴッゴッ

マサヒとドクターは墮天する以前の  
の知り合い。

別に…



アノコは  
マサヒとドクター  
の知り合い。  
ただ、マサヒと  
ドクターは  
墮天する  
以前の  
知り合い。  
アノコは  
マサヒと  
ドクター  
の知り  
合い。  
ただ、  
マサヒ  
とドク  
ターは  
墮天  
する  
以前  
の知  
り合  
い。



愛してる  
×ファイト  
おまえが欲しい



だからソレって  
実験素材的な  
イミでしょう？



ソレだけや  
ないや  
ないや  
ないや



ドクターこそ  
意外に  
不器用なん  
だわ…  
意外と  
バカ正直  
こいつの  
おぼろげな  
おぼろげな  
おぼろげな



## 編集後記

こんにちは、Neikoです。お腹まわりが重力に負け始め、でも珈琲とドーナツがやめられなくてヤバイ・・・と思っているものの、年齢のせいか全然減ってくれない脂肪に辟易する日々を送っています。某CMを見て「まちであんな風に痩せるのか?!」と関心していますが、運動2割・食事8割と聞きました。ある一定の年齢になると、やはり食生活の見直しが大切なんですね。という訳で、まず菓子パンを止め(ドーナツは除く)、炭水化物は米でとり、肉や魚をしっかり食べるダイエットを始めました。同時にビリー隊長のブートキャンプに入隊しました。

初日は開始10分で吐きそうになり、20分後には本気で吐き気に襲われて中止しました。運動して吐きそうになるなんて、中学の部活動以来ですよ。そして翌日には足を中心とした全身筋肉痛(T.T)

更に膝や腰、股関節を痛めるという情けないことが続き、ビリー隊長には休暇願いを提出することにしました。何事も己のレベルを十分に把握してから行動に出る必要がありますね。でも、折角の夏ですから体重を落として子供と一緒にプールへ行きたいものです。皆様も良い夏をお過ごしくださいね。

## \*\* 奥付 \*\*

【となりくみ事務局】

<http://www3.to/tonarikumi>

[tonarikumi@gmail.com](mailto:tonarikumi@gmail.com)

イラスト：ZEM

文：Neiko

【電子版公開サイト】ブックロブのpapier

<http://p.booklog.jp/>



## AZ stocks Vol.1～【無料】電子版同人マガジン

<http://p.booklog.jp/book/100041>

著者 : AZ stocks

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/azstocks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/100041>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/100041>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ